

海南島の1村落における生業の転換：自然保護政策・観光開発の影響
Subsistence Transformation in a community in Hainan Island: Impacts of
Environmental Conservation and Tourism Development

梅崎昌裕
UMEZAKI Masahiro

リー族の居住する海南島は中国大陸の南側に位置している。1988年に海南島が「経済特区」に指定されると事業投資が激増し、地方政府の主導による換金作物の導入と観光開発を柱とする農村開発が本格化した。農村社会も生業の市場経済化を余儀なくされ、自給的な複合生業は市場依存型の生業に転換した。

対象村落は五指山市の水満村である。水満村は亜熱帯の極相林におおわれた五指山の山麓部に位置している。1980年代まで町からの道路がなく海南島のなかでも最も開発の遅れた地域であったが、1990年代にはいると亜熱帯の極相林と歴史的にも有名な五指山を観光資源とする開発が始まり、現在では入場料を徴収するゲートのある観光村へと変貌した。時を同じくして、観光資源である森林の保全を目的とした条例が施行され、村落周辺における焼畑と草原の火入れ、狩猟採集が全面的に禁止された。

水満村の食生活で印象的なのは、水田耕作が行われている時期に、水田内・畦・のり面・水路など水田の周辺部に自生する野草を頻繁に食べることである。演者の調査によると、水路に自生する38種類の野草のうち25種類、畦に自生する29種類のうち5種類、水田内に自生する19種類のうち8種類が、それぞれ米の副食として食べられていた。いくつかの状況証拠から推測すると、水田周辺の野草の集約的利用は、焼畑農耕と狩猟採集というそれまで食生活に重要な意味をもっていた生業が政府の政策により全面的に禁止されたことに対する対応とも考えられる。水利システムの整備、ハイブリッド品種の導入による米の生産性の増加ともあいまって、水満村では、焼畑と狩猟採集の禁止にもかかわらず、米と水田周辺の野草、余剰米と交換して入手した肉類を中心とした、栄養学的に妥当な食生活が可能となっている。

水満村では、観光開発によって住民の一部は観光会社に雇用され、観光客に物品を販売することによる現金獲得の機会も増加した。それにともない、人々の生活の理想は、「酒を飲んで肉を食べる」ことから、より近代的で経済的に豊かな生活をおくることへと変貌しつつある。農村開発は、外部からの介入、村の中での意志決定、外部市場の状況など、複雑な要因に影響されるものであり、その相互関係性を解き明かすためには、学際的な視点による長期間の観察研究のさらなる蓄積が必要であると考えられる。
